

上維持は良好であった。現在までのところ10病変に対して施行し、一括切除率は80%、偶発症の発症を認めなかった。

内視鏡先端にキャップを装着せずニードルナイフによる粘膜下層切離を加えない簡便なEMRSHであるが、病変の安全・確実な切除と一括切除率向上に有効な手技であると考えた。

21 当科における大腸憩室症 — 右下腹部痛を訴える症例の臨床的検討 —

櫻井加奈子・大竹 雅広・角田 和彦
長倉 成憲・吉田 奎介

日本歯科大学新潟歯学部外科

【目的】右下腹部痛を訴える患者について、大腸憩室炎の頻度と急性虫垂炎との差異について比較検討した。

【対象・方法】1992年からの10年間に、右下腹部痛を訴え入院した122例のうち、確定診断を得た58例を対象とした。

【結果】憩室炎は21例で、右下腹部痛を訴える症例の17.2%を占めた。右側大腸憩室炎と虫垂炎の鑑別点として、病状の進行速度、悪心や嘔吐の有無、圧痛点の位置、右下腹部の腫瘤触知という点で違いを認めた。術前検査は超音波検査およびCTが施行され、虫垂炎において約80%の正診率が得られた。

【結論】右下腹部痛を訴える患者の大腸憩室炎の頻度は予想より多く、その手術適応決定においては、理学所見に加え、超音波検査やCTが有用であると思われた。

22 虫垂瘻からの Steroid antedrug 腸内投与が奏効した潰瘍性大腸炎の2例

宮澤 智徳・亀山 仁史・岩谷 昭
早見 守仁・桑原 明史・小出 則彦
山崎 俊幸・飯合 恒夫・岡本 春彦
須田 武保・畠山 勝義・本間 照*
朝倉 均*

新潟大学第一外科
同 第三内科*

潰瘍性大腸炎において従来の内科的治療に抵抗する難治例に対し虫垂瘻からの steroid antedrug 注入療法を2例に施行したので報告する。2例は数年にわたり内科的治療を受けていたが寛解と増悪を繰り返していた。今回全身 steroid 療法に抵抗性を示したため、腰椎麻酔下に虫垂瘻を増設しそこから steroid antedrug の注入療法を開始した。両症例とも約1ヶ月後の大腸内視鏡検査にて著明な改善を認めた。現在外来にて steroid の減量を行っているが寛解を維持している。以上より虫垂瘻からの steroid antedrug 注入療法は難治性の潰瘍性大腸炎において有効な治療の1つと考えられた。

第238回新潟循環器談話会

日 時 平成16年2月28日(土)
午後3時～6時
会 場 新潟大学医学部 第五講義室

I. 一般演題

1 重症の洞不全症候群が突然生じた1例

有賀 諭生・佐藤 暢夫・岡田 義信
県立がんセンター新潟病院内科

症例は82歳女性。41歳時に子宮癌、43歳時に転移性肺腫瘍の既往があるが、心疾患の既往及び家族歴は認めない。

平成15年11月5日、急性骨髄性白血病にて当